

漢文『画竜点睛』定期テスト対策問題 | 書き下し・現代語訳・句法の頻出設問と解答 解答・解説

問1

- (1) ひとみ（目の中の黒い部分・瞳孔）
- (2) 睛

※「画竜点睛」を「点睛」と書くのは非常に多い誤りです。「目」へんの「睛」と覚えましょう。

問2

- (1) 眼睛を点ぜず。
- (2) （筆で）描き入れる・点を打って描く。

※「不」は打消で、書き下しでは「ず」とひらがなに直します。

問3 ひとみを描き入れると、竜が（本物になって）すぐに飛び去ってしまうから、と張僧繚自身がいつも言っていたから。

問4 読み…つねニ／意味…いつも・そのたびごとに。

※「毎に云ふ」＝（理由を聞かれるたびに）いつもこう言っていた、ということ。

問5

- (1) 睛を点ぜば即ち飛び去らん。
- (2) すなわち（歴史的仮名遣いでは「すなはち」）

問6 ア

〈解説〉「点ぜば」はサ変動詞「点ず」の未然形「点ぜ」＋「ば」。未然形＋「ば」＝順接の仮定条件（もし～ならば）。已然形＋「ば」（確定条件）との区別は頻出。

問7 推量（～だろう）。

※「飛び去らん」＝「飛び去ってしまうだろう」。未然形＋「ん（む）」。

問8 ひとみを描き入れたならば、（竜は）すぐに飛び去ってしまうだろう。

問9

- (1) 人以て妄誕と為し、
- (2) ～だと思ふ・～だとみなす。

※人々は張僧繚の言葉を「でたらめだ」と思った、ということ。

問10 ウ

〈解説〉「妄誕」は「でたらめ・根拠のないうそ」の意味。「妄」はみだり・でたらめ、「誕」にも「いつわり」の意味がある。

問11

- (1) 読み…かたく／意味…強く・無理に・しいて。
- (2) 竜の眼睛（ひとみ）。（ひとみの入っていない白竜に、ひとみを描き入れることを求めた。）
- (3) 固く之を点ぜんことを請ふ。

問12 張僧繇の言葉をでたらめだと思ったので、本当にひとみを入れたら飛び去るのかどうか、実際に描かせて確かめてやろうという気持ち。（うそを暴いてやろうという気持ち。）

問13 読み…しゅゆ／意味…ほんのわずかの時間・たちまち。

※「須臾にして」＝「あっという間に・たちまち」。

問14 雷電壁を破り、

※「破レ壁」なので「壁を破り」と返って読みます。

問15（四匹の白竜のうち）ひとみを描き入れられた二匹の竜。

問16

(1) 再読文字

(2) 最初に副詞として「いまダ」と読み、下から返ってもう一度「ず」と打消で読む（「いまダ～ず」＝「まだ～ない」）。

(3) 未だ眼を点ぜざる者

※二度目の読み「ず」はここでは「ざる」と連体形になり、ひらがなで書きます。

問17（例）将・且（まさニ～ントす：今にも～しようとする）／当（まさニ～ベシ：当然～すべきだ）／応（まさニ～ベシ：きっと～だろう）／須（すべからク～ベシ：ぜひ～する必要がある）／宜（よろシク～ベシ：～するのがよい）／猶（なホ～ノ・ガごとシ：ちょうど～のようだ）／盍（なんゾ～ギル：どうして～しないのか）から二つ。

問18 読み…げんざい（す）／意味…現に今も残っている。「見」は「現」に通じる。

※ひとみのない二匹は、今も（寺の壁に）現存している、ということ。

問19 ひとみを描き入れられた二匹は、たちまち雷鳴と稲妻が壁を打ち破り、雲に乗って天に昇っていった。一方、ひとみを描き入れられなかった二匹は、（飛び去ることなく）今もそのまま壁に残っている。

問20 物事を完成させるために最後に加える、大切な仕上げのこと。

※「竜を画きて睛を点ず」＝最後にひとみを入れて絵が完成する（本物になる）ことから。

問21

(1) 全体はよくできているのに、肝心の仕上げが足りないために、完全なものになっていないこと。

(2) イ

〈解説〉「画竜点睛を欠く」は「あと一步の仕上げが足りない」場合に使う。アは「完璧だった」と褒めているので誤用（ほめ言葉には使わない）。ウは仕上げと関係のない、だらしない生活の話なので誤り。

問22

(1) 『歴代名画記』

(2) 張彦遠（ちょうげんえん）

(3) 唐

(4) 南朝の梁の時代の画家。武帝に仕え、寺院の壁画などを多く描いた名画家。

※ 『歴代名画記』は唐の張彦遠が著した、中国の絵画の歴史をまとめた書物です。

【補足・本文の異同について】本文は『歴代名画記』の張僧繇の条から核心部分を抜粋しました（原文ではこの前に、張僧繇が梁の武帝の命を受けて多くの寺院に絵を描いたことが述べられています）。また「騰去上天」は「騰去して天に上る」のほかに「騰りて上天に去る」と読む本もあります。テストでは教科書の本文・読み方に従って答えましょう。